

5 特別プロジェクト研究組織

動的脳機能とこころのアメニティ特別プロジェクト研究組織

1 動的脳機能とこころのアメニティ特別プロジェクト研究組織の活動

動的脳機能とこころのアメニティ特別プロジェクトは平成10年4月1日に発足した5年期限の研究組織であり、本年度が最終年度である。本学の10学系に所属する教官を中心とする脳とこころに関するクロスディシプリナリーな本研究組織は(1)こころを支える遺伝子と物質に関する研究、(2)こころを支える組織と機能に関する研究、(3)こころを支える社会と環境に関する研究をそれぞれ推進する3つの部門からなる。

本プロジェクト研究組織は、各構成員の研究を支援するとともに異分野の研究者間の交流の推進も重点項目としており、本年度は講演会を10回、国際シンポジウムを1回、国内シンポジウムを1回開催した。第2研究部門の太田信夫教授が世話人となり平成15年1月に3日間にわたって開催された国際シンポジウム「人間の学習と記憶：その理論と応用研究の最前線」では、国際的に活躍している高名な心理学者11名を含む国内外の137名が参加し、貴重な研究報告と活発な討議が行われた。我国でも学習形成の原理が模索されている中で、まさに時宜を得た実り多いシンポジウムであった。平成14年11月に開催された本特別プロジェクト5年間のまとめのシンポジウムでは、各研究部門につき代表的研究成果の発表と、関連分野の学外研究者の講演があった。このシンポジウムは、100名以上の参加者があり、討議を通して本特別プロジェクトの全容が概観できる充実した内容のものとなった。

この5年間に本特別プロジェクトで支援してきた各研究はそれぞれ成果が上がっているが、その中でこれまでの報告書に記載できなかったものおよび本年度に進展が見られたもの10件について、その研究成果を平成14年度「動的脳機能とこころのアメニティ特別プロジェクト研究報告書」で詳述した。

2 自己評価と課題

本年度「記憶」に関する3回目の国際シンポジウムを開催したことは、本特別プロジェクト研究組織のこの分野の研究活動が国際的に高く評価されていることを示している。また、本年度に発表された英文論文は約80編で、高いレベルの研究活動を維持できたと考えられる。平成14年10月に医療技術短期大学部が4年制化され、教育組織として看護・医療科学類が新設されたが、本プロジェクトの構成員である看護学分野の研究者は、こころのケアに大きな役割を担うこの新学類の設立に大きく貢献した。このように、昨年度の人間総合科学研究科の新専攻の立ち上げへの貢献も合わせて、本特別プロジェクトは、脳とこころの問題の教育・研究に対する時代の要請を認識し、将来の教育・研究を担う人材の育成に貢献できた。さらに、教育・健康・医療・介護等の現場に直接結びつく研究も進展し、研究活動の社会的貢献の面でも実績を上げることができた。

本特別プロジェクトが終了した後もこれらの分野の研究の発展は強く求められており、参加した研究者の今後の活動のために適切な研究環境・基盤を構築することが緊急の課題である。

ナノサイエンス特別プロジェクト研究組織

1 ナノサイエンス特別プロジェクト研究組織の活動

ナノサイエンス特別プロジェクト(ナノ特プロと略す)は、平成14年4月1日より5年間の計画で発足した。当初の研究員は、学内は7学系27名、連携大学院は2機関8名、学外研究員は3機関13名である。ナノサイエンスは、ナノメートルのスケールにおける新たな科学を創造しようというものである。このナノメートルのスケールは、物理的・化学的な概念ばかりでなく、生物学的な細胞や分子生物学的な遺伝子などが渾然一体となり、その境界が判然としない広大な学際領域である。ナノ特プロでは、この広大な学際領域における基礎研究を幅広いメンバーによる俯瞰的視野によって進める。また、あらゆる分野の旧国立研究所が林立し先端的企業研究所が活発に研究活動を行っている、「つくば」という恵まれた環境を生かすため、face-to-faceの産官学研究連携を推